寺島珠雄書誌目録刊行会会報

第四号

二〇一二年四月二〇日発行　発行人＝中岡光次　編集人＝前田年昭　連絡先＝岡山県赤磐市沼田四六八―一（〒七〇九―〇八一二）

出会い

小沢信男

知友各位とのそもそもの出会いは、はて、いつ、どこでだったっけ。老来おおかた忘却のかなたながら。しっかりおぼえている場合も、もちろんあって、寺島珠雄がその一人です。一九七二年秋、大阪市阿倍野区の向井孝の部屋を訪ねた折のことでした。もう四十年もむかし。この件は小著『通り過ぎた人々』に既述した。

その後に、寺島氏をまじえて人と出会う場合が幾度もあり、それらもおおかたおぼえている。おもえば、すこしふしぎです。

茨木市安威の富士正晴家へ同道したことがあります。私が寺島氏を案内した。初会からほどもなく、たぶん翌七三年くらいのこと。関西へくるときはかならず連絡せよ、というので、そうしたら、こうなった。委細はのちほど申しあげます。

岡本潤が亡くなったのは一九七八年三月だから、その前年のことだ。寺島氏からの来信で、板橋区上板橋の岡本家へゆくから来ないか、というので伺った。主は入院中の留守宅に寺島氏がいて、ボール箱いっぱいの写真を前に、どう整理したものだろうと楽しげに当惑していた。岡本氏の令嬢の鈴木一子氏が、やはり呼ばれて実家へきていて、お茶をだしてくださった。初対面でした。関西にいながら東京の先輩の面倒をみている。

入院先へ見舞ってくれとのことで、後日実行した。武蔵野病院といったかな、圭角するどい長身の岡本潤が、鼻を尖らせたまま縮んでベッドによこたわっていました。

関西へゆけば会う。東京へくれば会う。多用の折はせめて電話で声は聞く。そんなあんばいで、ときたま出会っていました。

一九八九年六月に、本郷の弥生美術館で、竹中労と寺島珠雄の対談があった。『鞍馬天狗のおじさんは』の著者とはじめて言葉を交わし、坊主頭の風貌姿勢を眼にとどめた。この二年後に竹中氏は亡くなりました。

この席に、月の輪書林の高橋徹がいたことを、当時は知らなかった。その高橋氏を寺島氏から紹介されたのは、だからその後、一九九〇年代のなかごろか。御茶ノ水駅へ来い、という連絡を受けて出向くと、駅前の石畳に寺島、高橋の両氏がいて、連れだって駿河台下の八羽という小料理屋へゆく。石神井書林の内堀弘、『彷書月刊』編集長の田村治芳の両氏がいて、にぎやかな宴席となる。即席の句会をやろうかと田村氏がはしゃいで、割箸の袋を集めたり。古書業界の三羽烏と、こうして出会い、知己となりました。

関西の寺島珠雄が、東京の誰や彼やを私に紹介してくれた。

東京の私が、関西の人を寺島氏に紹介した唯一の珍事が、富士家への訪問でした。

ＶＩＫＩＮＧ東京ブランチの発足が一九五五年で、富士氏の号令で私が奔走したので、そのころは関西へゆくたびに安威の竹藪をお訪ねした。来京の富士氏を迎えて、小宅でブランチ例会をひらいたこともある。笑いだすと身体をゆすって座布団ごと回転しそうに、ご機嫌でした。その後、一身上の不都合で私は同人を脱けた。以後は謹慎して、関西へ行っても、せめて宿から電話でお声をうかがうにとどめた。その高い敷居が、だんだん時効で低くはなっていたのだな。

そんないきさつはたぶん知らない寺島珠雄が、旧知ならば自分を同行せよ、と言う。まっすぐな要望でした。同伴者がいればよほど私も行きやすい。で、行った。なにを語りあったかはもちろん忘れた。おぼろな記憶では例の三畳ほどの狭い書斎ではなくて、縁側のひろい座敷で卓をかこんでいたような。あるいは、みしらぬ地元の者が旧悪（じつは同人の人と結婚し、じきに離婚した）の元同人とつるんで来たのに、主はややよそよそしかったのかもしれません。ともあれ、おかげで私は富士家の敷居をさらに一段低くできた。

帰りがけに、安威の坂道をくだりながら、寺島氏が笑い声で言った。「きょうのことを話したら、またとやかく言われるなぁ」

言葉通りではないが、こういう趣旨です。記憶に焼きついた。つまり、本日は満足したぞ、と私にまず告げている。知り合いにも吹聴するぞ。すると、へんに勘ぐるやつらもかならずいるが、われはわが道をゆく。敷衍すればこうなる語意が伝わった。ははぁ、こういう人なんだ。

人との出会いに、なにか独特の流儀がある人であったなぁ。無造作でいて、布石またはお返しかもしれないような。そこで、つい、おぼえてしまうのかな。◉

断片・寺島珠雄（4）

怪力「珠雄」丸の男気を見た話（続き）

中岡光次

《その3》ボディガード志願

私の口の軽さはよく問題を起こした。今もそれは変わっていないようだ。褒めるのは下手だが、けなしたりあげ足を取ったりするのは好きで得意だった。

関西レベルの「救援会議」の場であったと思う。私は釜ヶ崎救援会の責任者であったが、同時に関西救援連絡センターの事務局員でもあった。

当時はすでに学生運動は下火で、続発する「事件」で釜ヶ崎は救援センターにおいて大きな比重を占めていたから私の責任も大きかった。

センター事務局員の立場はわきまえていたと思うので、発言は釜ヶ崎からのそれとしてのものであったはずである。当時は中核派と革マル派が血を血で洗う抗争が関東では繰り広げられていたが関西ではまだ目立ったものはなかった。

救援活動の大原則は「思想、信条の違いを越えて」行うものである。党派は思想信条を問うことによって成立するものであり、往々にして思想を押しつけることによってその組織拡大をはかろうとする。

東京の救援センターはセクトの寄り合い世帯のようなものでその内実はどうでも良かったが勝手に全国の中央集権組織の頂点のような顔をしていた。何かあれば「地方」

「地方」と郵便ポストのようなことを言ってくれていたのである（今は「他府県」となっているらしいが）。

社民党の現×××区長が少年時代に釜ケ崎で私服警官の足下に爆竹を投げて逮捕され、暴動に発展したことがあった。少年は東京のセンターに弁護人選任依頼をし、弁護士もわざわざ東京から関西に相談もなしに高い汽車賃払って出て来て、報告もなしに帰っていったことがあった。

私は東京に抗議し、少年に電話の一本を入れさせろと主張したが、それも結局無視された。縄張りの問題などではないし、少年の軽率な行為を軽率なままで終わらせるべきではないと考えたかったのである。

閑話休題。関西のセンター事務局はノンセクトの集まりの感があった。センターの一加盟組織に過ぎない中核派がそれに満足するはずがない。センター「囲い込み」への意志が見え隠れしていた。そして華々しく活躍する党中央への弱小部隊としてのメンツもあったのか

「わが革共同中核派は反革命革マル……」

「私には中核派と革マル派の違いがよくわからない。どっちもどっち。けんかするならどんどんやればいいと思うが、やるなら迷惑のかからないところ、グラウンドとか河川敷のようなところでやって欲しい。私は革命派に興味はない。たとえ右翼でも救援する。」こういう発言を当てこすりでした。参加者は一様に沈黙を守った。「あーあ、言っちゃった、知ーらない」というようなものだったか。

その「知ーらない」が現実のものとなった。そこまで私も考えていなかったが、その直後に出た機関紙『前進』に、私を名指しで、「右翼をも救援するという反革命分子岩田秀一を抹殺せねばならない」ときた。

私が「右翼でも救援する」と言った発言の主旨は、あらかたの人たちには説明する必要はなかった。暴動が頻発していた時期のことである。暴動で逮捕された労働者が右か左か弁別する余裕も必要もない。救援対象は暴動に立ち上がった労働者そのものであり、つき合うなかで相手がどうしても拒否すれば退けば良いだけの話である。

現実に「スズキクニオ」という人物率いる一水会という新右翼関係の若者が暴動で傷つけられたのを自室で治療してやったこともあった（当時一水会が成立していたかどうかは不知）。

こういう話はなぜか思わぬ早さで伝わるものだった。当時逮捕されることが趣味ではないかと疑っていたQという男がやってきて、前進社に押しかけて「話わからせてやらんといかん」という。袋叩きにしてもわかる相手ではない。釜ケ崎労働者を「革命の腐敗物」と規定する定式マルキストへの憤りをまったく同感できるとしても、頼むから、お願いだからそういう話はやめてくれとお引き取り願った。

それほど時間が経たないうちに寺島珠雄が上がり込んできたのだった。一体誰からそんな情報が伝わったのかは聞きそびれた。「面倒臭いことになっているようだな。つこうか」という。この人は「ついてやろうか」というようなお仕着せがましい言い方はしない。

この人はあのはっきりとした眼の玉で私の眼をしっかりと捉えたままで離さなかった。ボディガードするぞというのであった。

自分の飯代もままならないのにこの大飯食らいの漢をどうすればいいのか、つまらない考えもよぎった。

「寺さんにはせねばならないこともあるだろう」といえば「かまわん」という

即座。私の眼を捉えて離さない。あの眼の玉で見据えられると、素裸にされている自分を思ってしまう。

寺島珠雄が私の立場であったら、人の助けを借りるだろうか、そんなことはあり得るはずがない。

「自分の始末は自分でつけるしかないでしょう」「本当にそれでいいんだな」「はい」という言葉は声に出なかった。

「わかった」と寺島は去った。

この人は、せっかく言ってやっているのに、という態度も取らない。こちらは喉から手が出るのを抑えて、無理をして断っているのだから、「困ったら言ってくれれば良い」ぐらい言ってくれても良さそうなものなのにとも思った。言うことは言ったとばかりにスタコラするのである。

まさか私のような者をたたき潰したとして党派として何の意味もあるはずがない。そう楽観しようとしたが、本当に気持ちの落ち着かない何日間かであった。

事態はあっけなく終わった。私は救援活動で食い詰めて大御所弁護士に拾ってもらい、給料をもらえる立場になっていた。そのイソ弁から叱られた。「なぜ相談してくれなかったんだ」と。「電話しておいた」という。「岩田秀一に指一本でもふれたら、関西の弁護士は中核派の弁護から一斉に手をひく。それだけは言っておく」と。

さすがにこの時、私は泣いてしまった。

しばらくして中核派はある弁護士を非差別部落民女性を差別したとして抹殺宣言を出した。この弁護士は大阪での新左翼系の裁判でその法廷での言動で唯一監置処分を受けた人物であり中核派の弁護に最も熱心な弁護士であった。

手の平を返したような中核派に対して、差別問題がからんだからか、関西の弁護団は歯切れが悪かった。ただ匿うしかなかったようであった。

この弁護士は、現大阪市長橋下が弁護士になりたての時にイソ弁として世話になった人物であるが、今は反橋下色を鮮明にしているという。橋下のやり方と中核派のやり方に重なるものを見てしまっているのだろう。

《その4》労組オルグとして

私が本当にお世話になった大御所弁護士は裁判官当時裁判長を勤めた吹田事件で被告団の黙祷を認めて物議をかもした。狭山差別裁判の再審で弁護団長を勤めたといえば誰のことかわかる人がいるだろう。

「真昼の暗黒」の八海事件では親友正木ひろしのあとを継いで無罪に導いた人だから、正木ひろしもちょくちょく顔を見せたが、客人の一人に森長英三郎もいた。電話を受けたのが一回と来訪が二回あったか。

大逆事件刑死者森近運平再審裁判で関係のあった向井孝を訪ねたいというから、サルートンの地図を丁寧に書いた記憶がある。もし、その時私に知識があれば寺島珠雄こと大木一治の部屋に仕事を抜けてでも森長弁護士を案内したと思うのである。

私が寺島と森長の関係を知ったのは最近のことである。何故『酒食年表』に「悼森長英三郎」があるのか不思議であった。

次の年アイオン台風でも女たちと芋を食った。

九月十六日　縫製労組の工場占拠が五十日近い夜だった。

はるか一面　田んぼの稲が倒伏していた

翌朝

窓の下　国鉄単線の機関手が汽笛を鳴らし手を振った。

玉蜀黍（とうもろこし）南瓜トマトにも助けられた十月半ばまでだった。

（悼　森長英三郎）

『酒食年表第三1998』から引用する。

埴谷雄高からのはがき

「森長英三郎さんは大島英三郎さんの宮城発煙筒事件の辯護人で、私が大島さん側証人となり、森長さんから……」

私はこの件は十分に知っていたし大島英三郎のエンリコビルに二、三日だったが逗留させてもらったこともある。続いて、

「文面に出る「森長英三郎さん」には長期の工場占拠ストで私は世話になり……」

この部分を当時の私は知らなかったということだ。

故郷東金町にあった「石井縫製工場」の七十日間にわたるストぶち抜きには、表に出ることの出来ない一治に代わって兄静雄が県労会議を代表して五回にわたる労働委員会でその折衝に当たった。当時静雄は勤務先の二千五百人の組合員を擁する京成電鉄労組の中央副委員長の要職にあった（『わが闘いと建設の歴史京成電鉄労働組合一六年史』）。森長弁護士がその後方で支援していたことなど知るよしもなかったのである。

石井縫製争議はセンセーショナルなものであった。『千葉県地方労働委員会五年史』にかなり詳しい。

「平均日給一三円として月額八七八円強であり、同地所在の同業「日東縫製工場」に於ける平均給与月額一八四八円と比較して著しい懸隔が認められた」

「…という状態で、従って従業員達は殆どの者が日曜も休まず、毎日電気が来ている限りは少しでも余分に労働することによって収入を高め辛くも生きているという状態であった」

労組要求書

一、労働組合の承認
二、労働基準法の完全実施
三、現行手当全廃本給十倍値上
四、交通費全額会社負担
五、日曜は有給有暇とすること
六、遅刻、早退は給料から差し引かないこと
七、拘束八時間、昼休五〇分、午前午後各一〇分の休憩実施
八、ミシンの私用利用を組合管理とすること
九、請負作業制度廃止
十、昼食時にお茶の支給
十一、拘束時間後の掃除廃止

本給十倍以上値上げ要求には驚くが、労組は根拠を示した。

全経費のうち人件費総額は僅か五・五％に過ぎず、人件費を除いた利益は三〇％を占めているから、決して経営を圧迫するものではない、と。

会社側は、一、二、五、六、九、十、十一項は承認したが、交通費負担は半額とし、第七項の昼休憩は五〇分を四〇分とけちり、ミシン私用は会社管理を譲らなかった。しかし、本給値上げは六倍まで譲歩したのである。それだけ最初から余裕があったということだろう。

労組はこれを不服とし、再考を迫ったが、今度は会社側はその回答を撤回し、争議が一治達外部煽動者によるものとして、労組員の家庭に「謹告文書」を配布して労組潰しを図り、地労委に逆あっせんを申立てたのである。作業場占拠の中止、集合寝泊まりの禁止、労組事務所の会社建物使用の禁止云々。

「地労委斡旋実行実に三〇有余時間に及び」会社側は組合側出席者の兄静雄と「日労」山本喜三郎（山本勘助＝ダダ勘助の実弟）の二人を「アカ」としての排除を求めた。組合側はついにハンストに突入した。

当時のハンストは命がけであった。県内のある争議では、「拒否して暴れる労組員を押さえつけてやむなくブドウ糖注射、残り十名はタンカで搬送」などという凄じい記述も前出『労働委員会五年史』に見られる。こうなると地労委も必死になる。

国鉄の機関手が支援の汽笛を鳴らしてからほぼ一か月後の一〇月一八日から就業再開することになり、組合側のほぼ完全勝利となった。唯一争いの残った給与は工賃で八割三分ほどの値上げに終わったが、その他の要求は全面承認。附記として「本争議に対して組合側から犠牲者を出さないこと」がつけ加えられた。

森長英三郎の名は「地労委」の当時の斡旋候補者名簿に見ることが出来る。

森長英三郎　40　弁護士　日大法学部卒、自由法曹団幹事、日本産業労働調査局理事、民主主義科学者協会理事。委嘱年月日。昭和22・1・16
住所　千葉県松戸市相模台

森長のこの争議との関わりは労働者側の斡旋員としてのものではなかった。争議が事件となった時には弁護人として真っ先に登場する存在であったということである。

会社総員六十二名。労組員五十八名、全員女工。平均年齢「十九歳乃至二十歳」と前記『五年史』には書かれている。

大木一治、二十三歳。独身者ばかりではなかったが、こんな環境では男気に燃えるしかなかっただろう。

あの時、寺島五十歳少し手前頃。森長七十歳一歩手前か。

もし、あの時私がこの事情を知っていたなら、日雇い労働者に変貌し、しかし実は変貌せぬまま頭の毛が薄くなった男と、「男気」を貫いた老弁護士との酒飲み話がそばで聞けたかと思うとつくづく残念でならない。

◉

情報BOX

貴重な提供を多く頂きました

関東地方にお住まいのK・Oさんから、『目録』第一次未記載の資料を二度にわたってたくさんいただきました。

この「できる達人」氏に「一体あなたはどういうお方なのですか？」という問いを発したのですが、まずはその返事のお手紙から。

私は、一会社員として、自分が興味をもった人物のの資料にあたり、その文章を読んでいる人間なので、同人とかその類の組織には属していません。

「群れに入らず、群れをつくらず」です。

そんな私がなぜ寺島珠雄さんの書誌作成に多少なりともお役に立てばと思っているのは、寺島珠雄さんが好きだからです。

正確には、本人と会ったこともないので、その文章が好きです。そして、丁寧に資料を読み、正確な記述を心がける姿勢に感ずるものがあったからです。

おかげで、西山勇太郎、矢橋丈吉、風間光作等々多くの人物を知ることができました。前田淳一についても「低人通信」で教えられることがありました。私なりに寺島珠雄さんへ恩返しをしたいと思っています。

詩人尾形亀之助とその評伝を書いた秋元潔について調べていたら、寺島さんとの関係が浮かんできました。何か関連資料が見つかったらお送ります。

＝K・Oさんから送っていただいた『目録』第一次未登載・未収集資料＝

★『ハイカー』これは前号一面にて紹介済

★『季刊論争』（編集者大沢正道／発行者国則三雄・発行所㈱カタロニア社＝高知市・発売所㈱ぱる出版）
これは『目録』116・論争社発行とは別物。
①創刊号（89年春号／2月25日発行・発行所土佐出版社。発売所記載なし）
「単騎の人　矢橋丈吉ノート（上）」
②2号（89年夏号・8月25日発行・発行所発売所前同
「単騎の人　矢橋丈吉ノート（中）」
③3号（90年春号／4月25日発行・他前同）
「単騎の人　矢橋丈吉ノート（下）」
★『にど　だもれ　回想　牧野四子吉・文子』（88年9月9日発行／編集発行牧野四子吉・文子回想文集編集委員会・製作岩波ブックサービスセンター）
「二十五年遅れで生まれた者の回想」
★『個に生きる―辻潤展出品目録』（編・製作「虚無思想研究」編集委員会）
〈開催日および会場〉（86年）
大阪　二月十日～二十二日　東宝画廊
京都　二月二十八日～三月十九日　アスタルテ書房
東京　三月二十五日～三十一日　えとふ
「幸福だった辻潤」
★『政治公論』（発行㈱政治公論社／編集責任者馬場喜敬・1969第58号・69年2月号）
「朔太郎の手紙一通をめぐって」
★『週刊読売』（62年4月15日号／21巻15号）
小説「手配師」
読み切り　新人異色短編小説　96P～100P
★『まひる』（まひる文学研究会／編集人太田博之）
①第十七号（69年3月）
「走り書　井上俊夫のこと」
②第十九号（69年8月）
「シッタゲキレイする概のある詩について」
★『酒』（発行酒之友社・東京／編集発行人佐々木久子・九州編集部徳永朝子）
①67年4月号（第15巻4号）
「釜ヶ崎の酔いだおれ」
②67年5月号（第15巻5号）
「政界酒番付への私的補足」
③67年9月号（第15巻9号）
「焼酎・泡盛・上野原」
★『歴程』通巻369号（平成2年2月号／追悼草野心平）
「草野さんと西山勇太郎」
★『京浜詩』97号（70年7月11発行／京浜詩の会・竹内多三郎編集発行人）
タイトル無し9行の菊岡久利追悼文
★『横須賀軍港案内』（編集発行人秋元潔〈住所不定〉「本誌記載の記事は無断転載をお断りしません」）
①創刊準備号（86年12月）
アンケート「横須賀が軍港でなくなる日はくるか」
回答者の一人・寺島珠雄（詩人）
②第二号（88年3月15日）
■軍港対話シリ…ズ①「逃亡の思想」寺島珠雄／きき手　秋元潔
★『若葉頃』（発行人三井葉子／編集人酒井万奈他・発行所　朝の詩会三井方）
①1986春№22（5月）
「あとがき」欄に「わざわざお越し下さった小島輝正・寺島珠雄両先生のお話を…」とある。
②1987秋№25（10月）
「意図につらぬかれた一冊
島岡房子詩集『花いちもんめ』寸感」
また「あとがき」に「寺島珠雄先生」とある。
③1990春№30（5月）
「朝の詩会小史」　一九八五年の項に二十五年記念号に「上汐町の夜から朝へ」の投稿ありという記述。ここでは「さん」付け。
④1997秋№45（9月）
小池朱実詩集『毛虫たちの季節』のこと

寺島珠雄書誌目録刊行会叢書

Ⅰ『詩集　日野善太郎の詩』　1000円（カンパ・送料込み）
Ⅱ『釜ヶ崎通信・別冊　まだ生きている』　2000円（カンパ・送料込み）

★申し込みは寺島珠雄書誌目録刊行会事務局（中岡光次）まで
〒709-0812 岡山県赤磐市沼田468-1　携帯080-5617-6669　ファクシミリ086-955-6261
ゆうちょ銀行振替口座　01300-5-55266（口座加入者名義　寺島珠雄書誌目録刊行会）

お申し込みの際は，協賛金やカンパと区別できますよう払込取扱票の「通信欄」に叢書と明記をお願いします。
また，初めて送金される方は，当会を知られた契機（紹介者等）を書き添えていただくと助かります。

★『無限通信』（編集責任者　嶋岡晨発行所・政治公論社無限通信編集部第3号（71年12月1日）
ポエム・レーダー「萩原恭次郎の埋もれた詩二篇」
★『馬』（発行人井本木綿子　制作百鬼界）
①第11号（81年12月25日）
「大場康二郎の手紙のこと」
②第15号（85年12月25日）
「びっくり三件、書き添えひとつ」
★『ニヒリズム研究4』自由の探究（編者荒川畔村発行所星光書院　発売所文教出版K・K）
「哀れな人間」大木一治
○これは「本」に分類か
★『回想　清水清』写実への道別冊（91年9月30日発行者清水純子　発行所清水清作品集刊行会）
「協力とまぶしげな顔と―清水清を思う―」

『目録』第一次に記載あるも未発見未収集だった物

◆A―14『海風』4号（89年3月1日／発行人・海風の会同人　編集人・原鉄志　発行所・海風の会愛知県渥美郡）
詩「おはなし」
◆C―55『小松亀代吉追悼　反逆頌』（小松亀代吉一周忌発行／72年4月12日・非売品ガリ版製／反逆頌刊行世話人会代表逸見吉三
「晩年の手紙から」
◆C―56『自由の前触れ』―関東大震災七〇年・大杉栄・伊藤野枝・橘宗一虐殺記念誌―（『沓谷だより特別号』93年9月16日発行／編集発行「大杉栄らの墓前祭実行委員会）
「切り抜き帳一冊のこと」
◆C―57『柳井秀の詩』（編集発行犬山市鵜飼町666向井孝／94年2月）
「番外の話」
◆C―89『月の輪書林古書目録10特集・美的浮浪者竹中労』（平成9年11月30日／月の輪書林・高橋徹）
「美的浮浪者の過程―私記・竹中労」（本文のみ）
◆C―110『遺言』（刊行同人　田中英夫、木村三山、久米茂、遠藤誠、柏木隆法、畠田真一、中島康允、内田博／発行所黒痴社　熊本県荒尾市、中島方）
①通巻No.59（82年5月1日）
「西山勇太郎ノート（1）」
②通巻No.62（82年7月1日）
「西山勇太郎ノート（2）」
③通巻No.65（82年9月1日）
「西山勇太郎ノート（3）」
④通巻No.66（82年10月1日）
「西山勇太郎ノート（4）」
⑤通巻No.68（82年11月1日）
「西山勇太郎ノート　最終回」
要収集号（未収集・47号付録総目次より）
○通巻No.28（80年8月25日）
詩「時計―岡本潤に―」
○通巻No.32（80年12月1日）
「菊岡久利のこと抄・ほか一篇」

『日録』第一次記載分の追加物

◆A―41詩誌『七月』
①第50号（86年9月）
「九十人に二人の写真から」
○109頁二番目の写真に小野十三郎の左隣に寺島の姿あり（82年1月、三井葉子詩集『君や来し』出版記念会）。
②第54号（87年5月）
書評「雑文の味、卵の味　三井葉子随筆集『つづれ刺せ』読後」
◆A―55『新日本文学』
①No.579（97年3月号）
［特集］詩の変革をめざして　小野十三郎追悼
「小野十三郎断章」
②No.582（97年6月号）
詩「汁粉　その他　酒食年表第三抄」
◆A―18『関西文学』（VOL255　85／5）
「自著を語る『西山勇太郎ノート』に関する断章」
◆A―23『月刊近文』（第12巻9号通巻130号／77年9月）
「辻まことさんの歌について」
◆A―78『日本の底流』（No.5／72年12月20日）
「●補足『青春と歴史の梶棒』吉本孝一の新資料を見つけて―」
関連：〈底流ジャーナル〉23
「京阪神をかけめぐるガリバン『ヤジ馬』」
松繁逸夫の個人誌の寺島による紹介で、寺島自身の筆によるかどうか判然としない。

その他参考文献
◎『黒の手帖』19（75年9月）
「自由クラブの時代」
◎『月の輪書林古書目録十三　特集「李奉昌不敬事件」予審調書訊問調書』他

（以上K・O氏提供分）

『人間喜劇』他について

前号一部報告の「富士正晴記念館」（茨木市立中央図書館併設）から収集できたものは以下のとおり。

東淵修の除名要求から分裂解消した『人間喜劇』

◆A－79『人間喜劇』（編集人井上俊夫　発行人竹島昌威知　発行所人間喜劇の会・西成区東田町一九「銀河」内）

①創刊号（66年7月1日）

詩「スケッチ抄（1）」

②第2号（66年8月1日／発行所の住所抹消）

折り込みチラシ

「都合により本号より発行所を左記の所に移しました。今後「銀河」とは一切関係ありませんので御了承下さい。」発行所住所は竹島方に、「例会変更通知で「会場が「銀河」（東淵経営）から新世界の喫茶バンビに。問題とされたのは寺島の代表作の一つであり初出

詩「ささやき ―スケッチ抄のII―」

袋は
ビニールより紙がいい
新聞紙より丈夫で
セメン袋ほどでかくないやつ
バラスより砕石
それと鉱滓も使えるだろう
置場を確保しよう
分散貯蔵
まずあすこのまわりへ
それから街々の
名コーナーも重要だ
なかみを吸った卵のカラが要る
トンガラシはめし屋でいただきだ
ワイヤーを都合できる現場はないか
9ミリ　13ミリ　16ミリどれでも
この配置はやっぱりコーナーだ
太鼓と鉦も準備しよう
左官のコテ板みたいなのを鳴らされて
音で負けた体験は痛い
旗は
おれたちの汗くさいシャツ
女たちのしみのあるパンティ
継いだりはいだりで匂いゆたかに
シャリの問題は極秘事項とする
うたう時がもしあるとしたら
その時にだ
じゃ　うまくやれよ
おお　またあしたな

東淵修はこの詩を暴動を扇動する「アカ」のおっとろしい詩として寺島の除名もしくはこの詩の削除を要求したのであった。この時のいきさつはA－52－2『新潮』67年2月号に詳しい。

『川柳ジャーナル・別冊』河野春三特集号（72年3月10日発行　編集人松本芳味）

これは「富士正晴記念館」から拾ったものではなく、新しく発見されたもの。河野春三の古稀記念特集で、ある川柳家から提供を受けることが出来た。河野は戦後現代川柳追求の先頭を走った川柳家で、詩・川柳・俳句というジャンルを超えた「交友交流誌」的な『匹』『風』に寺島の作品は登場する（『匹』は未調査）。河野が亡くなった時はA－15『風』に追悼詩も詠んでいる。

同特集号の河野に対するアンケート「河野春三と私」に答えたもので、めずらしい記述があるので紹介する。

「三年あまり前だろうと思う。紹介してくれたのは、いまもボロを出さずにやっているイカサマ詩人であった。……」

同じく『人間喜劇』同人であった山内清の回答

「出会い・カマガサキの銀河書房という古本屋の一隅……」

銀河書房の経営は東淵修で、寺島が「イカサマ詩人」というような表現を使って人を非難するのは、普通はありえない非常にめずらしいことである。

この後寺島は寿司屋の娘と情死行に出るも舞い戻り、『釜ケ崎通信』へとつながっていく。

◆A－17『釜ケ崎通信』（発行人竹島昌威知　編集人の表記なし）②　創刊号（68／9／25）～No.6揃

①No.1（68年9月25日）

「日記（一九六八年）」

②No.2（68年10月20日）

「日記（一九六八年）」

最末尾　一号に対して伊藤信吉、大木静雄両氏から発行費援助を…秋山清、井上俊夫、鈴木勝氏はじめ多くの方々が批評を…

③No.3（68年12月20日）

「日記　一九六八年（3）」

本文中に「雨」「手」「伝道」「友ヒト

リ」の詩あり。
④No.4（69年2月25日）
「日記（一九六九年一月××日）―本と人と状況など―
「来信紹介」秋山清、風間光作、伊藤信吉、山口英、岡本潤、小川光生、大木静雄等
⑤No.5（69年11月25日）
「日記」（一九六九年九月×日～十月×日）
九月××日詩集『釜ヶ崎通信別冊・まだ生きている』の集まり。発起人三好弘光、竹中労、竹島。参加者小野十三郎、秋山清、港野喜代子、向井孝、高島洋、他。
この号から寺島と竹島の問題意識のすれ違いが明らかになる。
⑥No.6（70年8月1日・終刊）
「番外・日記　反省から展望への手がかりとして」
◆A-34『鯤』（編集発行人竹島昌威知）
①創刊号（70／5／1）（2号～5号はあいりん資料室に所蔵）
「編集前記」「日記　三月××日～四月××日）
「編集後記」

◆A-68『地帯』（編集山内清　発行人東淵修　発行所西成区東田町19銀河書房内）
詩「記録」　筆名黒木重雄

〈本・アンソロジー〉新発見

◆『混沌の丸山実を想う　丸山実追悼文集』（00年10月10日　丸山実追悼文集刊行委員会・編者代表大野明男、猪野健治他）
「お好み朝食付きご一泊」
丸山実は『現代の眼』第四代編集長。

《関連雑誌（2）　その他・取り上げられたもの》
◎『ちくま』（筑摩書房発行　編集者松田哲夫）
第345号（99年2月1日）
「寺島珠雄さんのこと」　森まゆみ
◎『週刊ポスト』（88年4月8日号）
書評『『文化』の名に値する離俗の詩　詩集酒食年表』いいだもも

《C本③アンソロジー等》
◎『百怪、我ガ腸ニ入ル　竹中英太郎作品譜』
（90年8月31日　編者竹中労　三一書房）
「竹中英太郎私記」

会計報告（2012.12.20～2012.4.15）

◇収入

繰越		84,067円
協賛金		
11.12.19～12.2.10	9名	39,000円
2.11～4.15　森瑞枝さま/K.Mさま/K.Tさま	3名	17,000円
（協賛金　小計		56,000円）
叢書売上	各1冊	3,000円
収入合計		**143,067円**

◇支出

振替手数料（11件）	1,200円
会報発送費　第二号	4,400円
第三号	4,880円
その他通信費	1,980円
封筒、切手、葉書類　その他文具類	3,450円
機器購入　EPSON EP-804AW 三種複合機（コピー用）	21,500円
同インクセット他	7,030円
同黒インク	1,050円
通信用SD他	2,560円
中古ノートパソコン	5,850円
複写代（図書館等）	9,830円
同（コンビニ）	1,370円
〔編集部〕通信、複写、プリント代他	4,860円
支出合計	**69,960円**

◇差引収支（繰越）　73,107円

【近事辺々】

中岡光次

★今年の春は一週間ほどの遅れ。二月の末には日当たりの良い川原の土手であれば顔を見ることの出来た土筆や、薹立ちし始めたからし菜の姿はなかった。

私の住まいはぶどうのハウスや桃畑があちこちにあるようなところにあるから、土筆やからし菜などはいくらでもあるが、犬の散歩コースにあたるところが多くて摘む気がしない。以前なら遠出して山程からし菜を摘みに行ったが、今年は身辺雑事が多すぎて、我が家用にしか漬物もできなかった。

土筆は醤油で甘辛妙め。からし菜は若芽をおひたしにして苦みを楽しみ、あとは漬物にする。三日ほどしたら水が上がってくるので、天地返しをする。その時の涙の出具合でからし菜の良し悪しがわかる。

二年前の秋のある日騒動が起こった。かなり広い黒大豆畑が一夜にして一本残らず全滅した。犯人は親子連れ数頭の猪であった。それ以来さすがに電気柵の設置など対策が進み被害は最小限にとめられているが、どうしようもないのが竹林である。

猪君はなかなかのグルメで、筍も地上に頭を出したやつは相手にせず地中にあるやつをかたっぱしから掘り起こして食べてしまう。

まだ暗いうちから、台所でごそごそして酢みそと木の芽みそをつくり、米を研ぐ。馬鹿犬連れて、クワをかついでいそいそと。なんじゃこれは、猪野郎め、溜め息つきつつとぼとぼ引き返す。朝八時開店の朝市に行ってたったこれだけを七百円で買う。三袋だけの出荷。猪君被害甚大なり。生食不可であったが正真正銘の朝堀物はやはりうまい。

地上に頭を出さない筍にあくはない。掘り出すとその時からあくが出はじめる。刺し身として食するのは時間との勝負である。酢みそと木の芽みそ、そして美味いわさび漬けがあれば言うことなし。ああ、よだれが出そう。やはりこいつには冷酒が一番。酒は朝酒が最高。奥丹波の銘酒「小鼓」があれば言うことなし。しかし、あくが出始めたやつもそれはそれで微妙にうまい。春のおいしさは苦みやえぐみであり、あくを楽しむなかにある。筍ご飯に入れるやつはしばらく放っておいてから炊飯器に放り込む。もちろんあく抜きなどせずにである。あくぬきしていじめた筍とあくが出始めた素直な筍とは全く違うのである。

明石生まれで高校一年まで育った私にとって、春といえばやはりイカナゴである。それもフルセ(成魚)と養魚の釜揚。フルセは何をしても可。大きくなりすぎても骨が歯に当たることはない。煮つけるなら、同時に出てくる新牛蒡が相性が良い。新牛蒡のあく抜きは五分ほど水にちらすだけで済む。堀たてならそのままかじってもうまい。少し甘め、すき焼きより少し軽い程度の味で軽く煮つければ良い。冷めてもうまい。これは芋焼酎のロックがＯＫ。

岡山のスーパーでも「釘煮」用の幼魚がここ数年売られるようになったが、「釘煮」は作ったことも食べたこともない。佃煮類はなぜか食べる気がしない。「釘煮」は伝統料理のように誤解されているが、その佃煮としての歴史はまだ新しい。わたしの子供の頃は当然なかった。捕れ過ぎて肥料か廃棄せざるを得ないことに頭を痛めた明石浦魚協の職員が考え出した開発商品なのである。

★久し振りに川柳の大会に参加した。私が一番に利用している地元図書館が会場であったこともある。兼題四、席題一のうち四題に八句投じた。投句箱に放り込んですぐ会場を離れる事情ができたので、句会の様子は知らない。一週間ほどして大会報が送られてきて、私の成績は平抜が三句という惨敗であった。少しは自信のあった二句は没。推敲もせず会場での即席つくりだからそんなものとは思うが、やはり二年近く作句していないハンデは切実なものがあった。句は作らねばならない。最近の私の文章が荒れているのは生活の荒れが大きいが、やはり句作していないことも大きいと気づく。

柳号も記しておいたのに無視されて戸籍名丸出しで載せられたのはやはり恥ずかしい。

★中岡光次という筆名を廃止することにした。筆名を変えるということではなしに、戸籍名に戻すのである。すでに神戸で出されている自由誌『ゆう』と某川柳結社の機関誌には戸籍名で書いた。ただしこの「刊行会」においてのみ、今変更すると混乱が生じそうなの

で、白黒決着つくまでは、中岡光次を維持することにしている。

絵詞作家日野十成（かずなり）こと又重勝彦さんから丁寧なお手紙を頂いた。返事をさておいて図書館にその絵本を読みに行くことにした。そしてしみじみ思うことがあった、無垢な子供に対する語りかけ、その行為が文章を書くということの原点にあると感じたのである。

絵本を読んでいるとどぎまぎしてしまうのである。どうやって読めばよいのか、とさえ思う。鎧兜を装備して他人の文を読み、文を書く自分の姿に気づくのである。

筆名廃止は90歳になる母の諭しによる。いわく「人様を批判したり、世の中を問題にするなら、なおのこと本名で堂々と書きなさい、おまえにはお父さんがつけてくれた良い名前があるじゃないの」「本名で書こうとしないのはやましいことがあるからやろ」

はいそのとおりです、やましいことはあります。言葉を変えて聞けばつまらぬ鎧兜は脱いでしまえ、ということに気づかされる。

この人にどうしても会いたい

『青洞記』・回顧展（２００４年～）「青洞記と交流のあった七十年代における百冊のミニコミたち」Web用・改定版。この存在を教えられた。

主体その人は長船青治氏。百冊のうちの（15）『低人通信・第二号』発行・一九七〇・不明／印刷・B5版・三段組・手書きの青焼きコピー版／発行人・寺島珠雄

〈感想〉これはサルートンに寺島氏が向井さんを訪ねて来たときにもらったものだ。「甲府刑務所に居たんだって？　舎房はどこだった？」と話かけられて、照れくさくなって「いや～、ただの未決ですよ」と答えたら、寺島氏はうれしそうに「なんだ未決かあ。」と言われたのだが、やはり人が出会うときは差しで飲めるものならそうすべきだったと思う。

この文章をそのまま理解すると、寺島珠雄は甲府刑務所にも服役した経験があることになる。この事実は、私が知る限り寺島自身が明らかにしていないことだから興味は沸いてくる。今私の手もとにあるのは第四号のみ。

百冊のうちの（8）『ＰＡＸ通信・第七号』
発行・一九七二・七・二

〈感想〉これも旭町の自連社のアジトで出会った人と交換したもの。

岩田秀一くんってほんまにもう死んでしまったのかなあ？

ちょっと待ってよ、長船さん。岩田秀一は中岡光次と名を変えてまだ生きてる、なんとか生きてるから。これは私を死んだことにした人間がいることになる。

百冊のうち（34）『フレネズーロ』を探して疲れたのであきらめた　という現物が唯一ないという話。

作・下条かおる、こと岩田秀一（通称・哲八・てっぱち）氏が70年代初頭に釜が崎共闘から発行していたガリ版印刷の個人通信のことなのであるが、彼はどうしているのか？と向井さんが１９９９年の夏に上京されて我が家に泊まった時に聞いたら、もう、ずっと昔に病気か何かで亡くなったのではないかなあと言われたのだ。

（私には、今でもどこかで生きているような気がしてならないのであるが、）

ああ、彼もその後（アナキズム運動紙・『自由連合』廃刊後）消息を絶ってどこに住んでいるのかさへ分からなくなったのだと独り寂しい思いにおそわれたのを覚えている。

たぶん彼のミニコミは、郷里の私の部屋の押入れの天袋に仕舞って来た衣装ケースいっぱいのミニコミのなかに紛れて、今も主人の帰りを待っているのか……

私を殺した犯人は向井孝であるらしい。でもわかる。

他にもいろいろと書いてくれていて、わたしのことを心配してくれている長船青治という存在に沈没した。原発や福島支援に動いていることがわかる。彼を知っている人がいたら伝えてほしい。どうしても差しで酒を飲みたがっていると。

編集後記

最近話題の映画『サウダーヂ』『サイタマノラッパー』に出てくる土方仕事を見ていて感じたのは、40年前と仕事の質が変わってしまったのではないかという疑問だ。変わったのは風景か、いつからか。手掘りからユンボなどの重機に変わったのはずっと以前だが、地下足袋が韓国製や台湾製に変わっていったのがちょうど40年前だ。どちらにしても気になる。〔前田〕